

3つのポリシーと大学属性との関係性の分析

齋藤 朗宏 (北九州市立大学)

大学における 3 つのポリシーはここ数年でほぼ定着したと考えることができる。その内容は本来各大学の持っている教育理念等に基づくものであるべきだが、一方で、大学の持つ何かしらの属性の影響があることも否定できない。そこで本研究では、3 つのポリシーについて、設置区分など大学属性が与える影響を分析した。結果、地域性や規模、大学の設置区分において内容的な差異を見出すことができた。

キーワード：アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、テキストマイニング、コレスポネンズ分析

1 はじめに

1.1 3つのポリシー

日本の大学における 3 つのポリシーは、平成 11 年 12 月の中央教育審議会(以下中教審)答申においてアドミッション・ポリシー (以下 AP) の重視が掲げられたことに始まり、平成 24 年度実施分の大学機関別認証評価において大学評価基準にディプロマ・ポリシー (以下 DP)、カリキュラム・ポリシー (以下 CP) が定められていることが盛り込まれるようになったこともあり、今では完全に定着したと言っても良い状況である。

こういった背景から、3 つのポリシー、特に AP に関する研究はここ 20 年程で大きく進んでいる。嶋野他(2004)における各大学へのアンケート調査報告を嚆矢とし、山村他(2014)による AP の効果検討があり、近年でも樽松・天野(2020)による国公立大学各学部の AP に関する内容分析など多岐に渡る。

こういった研究が行われる背景には、3 つのポリシーを定めることの難しさがあると考えられる。これらは中教審答申、大学機関別認証評価への導入を契機として導入が進んだものであり、大学自体がそもそも備えていたものとは言いがたい。言い方を変えれば、カリキュラムや入学、卒業の基準が先に存在し、後からそれに合わせて 3 つのポリシーを付け加えているということになる。

1.2 研究の目的

そこで本研究では、特に大学属性に注目し、3 つのポリシーと属性との関係性を明らかにする。この研究を通して、各大学が、それぞれの立ち位置を踏まえた 3 つのポリシーを検討するための材料を提供することを目的とする。

2 方法

2.1 分析用データベース

本研究では、齋藤(2020)において作成した 3 つのポリシーに関するデータベースに大学の設置区分や所在地、地域区分や学生数といった大学の情報を加えたものを分析対象とする。同研究では、収集対象のデータは以下のように定義している。

分析対象は、2 つ以上の学部を持つ四年制総合大学における、全学の 3 つの方針とする。

総合大学の定義は困難だが、便宜上ここでは、2 つ以上の学部を持ち、少なくとも 1 つ以上の文科系課程を持っていることを条件とした。単科大学を条件から外したのは、単科大学においては、学部の方針と全学の方針との区別が困難なためである。

複数学部であっても、経済学部と経営学部の 2 学部のみという場合のように、類似した教育を行っていることが想像される学部のみで構成されている場合には、同様の理由で分析対象から除外した。文科系を少なくとも 1 学部含むことを条件としているのも、この点を考慮している。

また、その結果国立 50 大学、公立 35 大学、私立 319 大学の 404 大学が分析の対象となっていた。

2.2 コレスポネンズ分析

3 つのポリシーそれぞれについて、主要な単語と国公立区分との間でのコレスポネンズ分析を行った。この分析には KH Coder 3.00(樋口, 2004)を用いた。

2.3 属性と内容の集計

全学の 3 つのポリシーをすべて公開している 245 大学について、地方区分や設置者、学部生数の多少などと 3 つのポリシーに含まれている内容から集計を行い、特徴的な組み合わせについて検討を行った。尚、

3 つのポリシーに含まれている内容については、齋藤(2020)で用いた出現単語のクラスター分析によって求められた分類を用い、それぞれのポリシーにその内容が含まれているか否かで判断している。それぞれ以下の通りである。

AP1：基礎学力を中心とした定型的な内容。AP2：精神に関連する内容。AP3：能力活用。AP4：思考力と表現力。AP5：選抜方法。AP6：学修の目的意識。

CP1：建学の精神について。CP2：実践力。CP3：人材育成。CP4：科目編成。CP5：成果と評価。

CP6：学びの形式。

DP1：思考力と表現力。DP2：課題解決。DP3：実践力。DP4：分析力。DP5：授与条件。DP6：教育目標。

2.4 関連の検討

学部学生数などの指標と単語の出現回数について相関係数を算出した。用いた単語は、齋藤(2020)で抽出した出現頻度上位のものである。

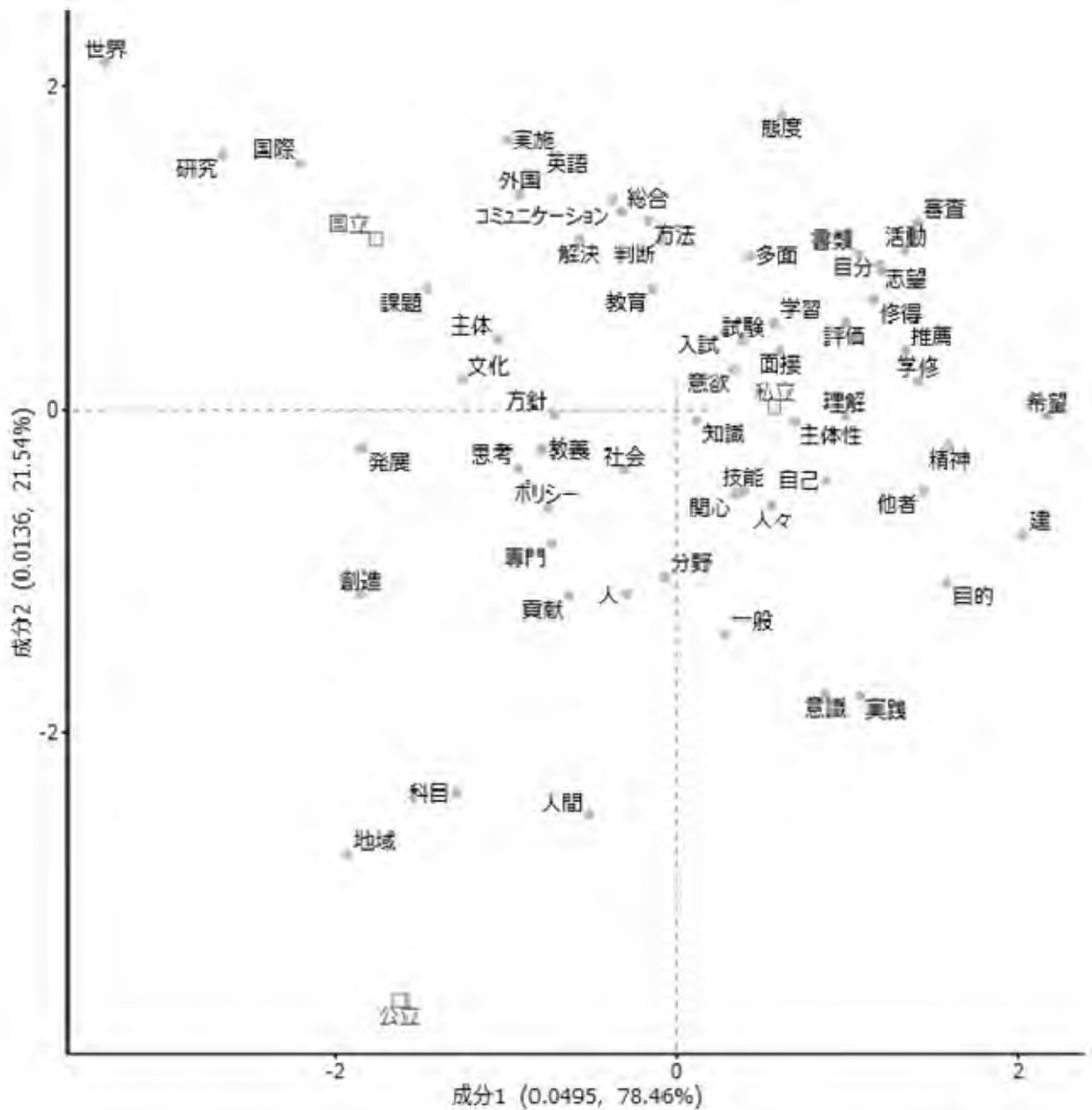


図 1 2019 年における国公立大分類別×AP のコレスポンデンス分析

3 結果と考察

3.1 コレスポネンス分析

国公立大分類と3ポリシーそれぞれとのコレスポネンス分析の結果は図1から3の通りである。

図1の結果より、横軸左側は「世界」「地域」「研究」「創造」といったキーワードが並び、実現したいことを指しているようだ。一方右側は、「審査」「活動」「志望」など入学時に問われることが中心となっている。それらに加えて、「精神」のような私立大学

特有の内容が示されているのが特徴である。

縦軸では、上側に「世界」「国際」「英語」、下側に「地域」があり、グローバルとローカルが中心的な解釈と言えるが、一方で上側の「態度」、下側の「意識」「実践」「科目」などは明確な解釈が難しい。

国公立大学とキーワードの組み合わせでは、「地域」「貢献」の公立に、「世界・国際」「研究」の国立、私立は「建学の精神」また具体的な入試に関する言及が多いという点が特に目立つ特徴である。

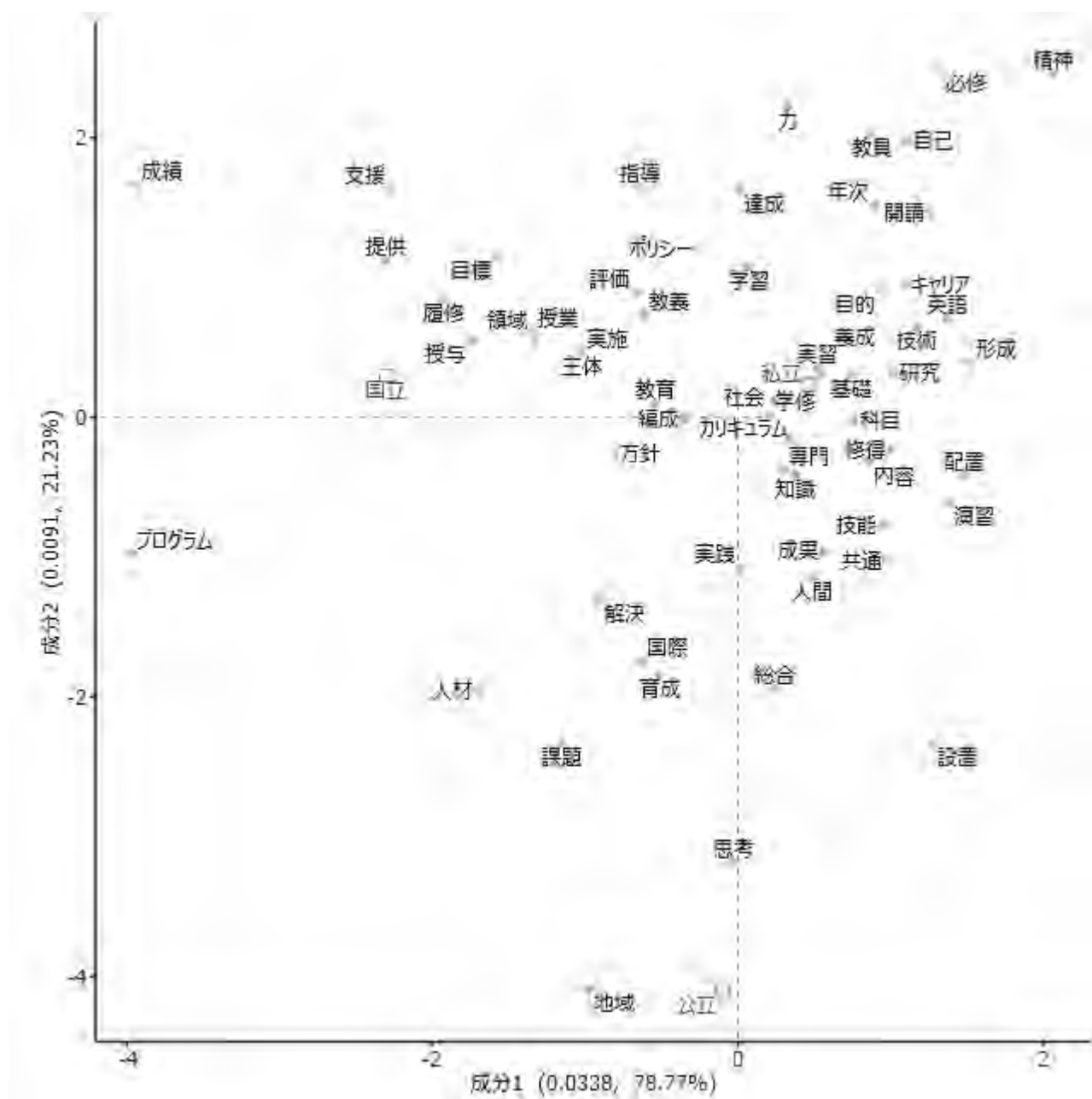


図2 2019年における国公立大分類別×CPのコレスポネンス分析

図3より、横軸左側では「発展」「地域」「国際」が、右側には3ポリシー全体を通して私立大学に特徴的な「建」「精神」を除くと「態度」「自立」「他者」などが並んだ。これらから、CPと同様に、左側が人材の社会におけるあり方、右側が自己実現を中心としていると解釈できる。

一方縦軸では、下側に「目的」「体系」「尊重」などが、上側に「人々」「視野」「科学」などが見られた。必ずしも一定の方向性を示しているとは言えない

ため、明確な解釈は難しいが、強いて挙げるのであれば、下側では「意欲」などの姿勢も含めたあり方を示しているのに対して、上側ではより具体的な能力を示しているという解釈があり得る。

DPにおいてもやはり「地域」が特徴的な公立大学と「建学の精神」に特徴のある私立といった傾向は変わらず、国立大学については、「世界」「専門」「学問」といった単語に特徴が見られた。

表2 8地域区分と3ポリシーの各内容に関する記述を含む割合

	北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州
AP1：基礎学力	83%	77%	72%	71%	68%	72%
AP2：精神	42%	48%	53%	47%	32%	40%
AP3：能力活用	83%	74%	75%	59%	68%	52%
AP4：思考力と表現力	50%	53%	39%	49%	36%	44%
AP5：選抜方法	17%	40%	39%	39%	25%	24%
AP6：目的意識	67%	63%	56%	55%	39%	40%
CP1：建学の精神	21%	35%	22%	39%	11%	8%
CP2：実践力	54%	68%	47%	63%	68%	76%
CP3：人材育成	58%	62%	50%	63%	<u>75%</u>	<u>40%</u>
CP4：科目編成	96%	79%	86%	86%	82%	92%
CP5：成果と評価	67%	65%	78%	61%	64%	64%
CP6：学びの形式	46%	49%	36%	45%	29%	40%
DP1：思考力と表現力	<u>42%</u>	58%	47%	61%	54%	<u>84%</u>
DP2：課題解決	58%	<u>65%</u>	72%	71%	64%	<u>88%</u>
DP3：実践力	33%	<u>58%</u>	<u>28%</u>	55%	46%	56%
DP4：分析力	29%	33%	50%	39%	25%	52%
DP5：授与条件	83%	89%	86%	84%	82%	88%
DP6：教育目標	71%	73%	61%	67%	57%	64%
合計	24	81	36	51	28	25

3.2 属性と内容の集計

まず8つの地域区分とポリシーの含む内容についての集計を行った。その結果は表1の通りである。ここで、たとえばAP1の関東は77%となっており、これは関東地方の大学でAP1に関する記述があったのは77%ということである。特徴的な組み合わせについては下線を引いている。

九州地方においては、DP1とDP2、思考力と表現

力や課題解決に関する記述の割合が極めて高くなっている。また、中国・四国地方ではCP3、人材育成に対する言及率の高さが見て取れる。

九州地方の思考力と表現力、課題解決に着目してより詳細に見るために、大学ごとの単語の平均出現頻度を確認すると、「コミュニケーション」では全国平均0.53回なのに対して九州地方の大学では0.76回、以下同様に、「論理」は0.33回に対して0.6回、「解

決」では 1.07 回に対して 1.6 回、「思考」は 0.82 回に対して 0.88 回となり、特に思考を除く 3 つのキーワードの九州地方の大学における出現頻度は、他の地方よりかなり明確に高くなっており、ある程度地域性はありそうである。ただ一方で、DP1 と同じく思考力と表現力を扱っている AP4 は九州地方の大学において、特別高いと言える値を示していない。これらの点から、DP において思考力や表現力への言及している回数が多いからと言って、九州地方の大学において思考力や表現力が重視されていると言えるわけではな

い。

よって、何故言及件数が多くなっているのか明確に示すことはできないが、3 つのポリシーを制定する際には、他大学の事例を参考にするケースも少なくないようだ。飽くまでも仮説の域を出るものではないが、たとえば、近隣の大学を参考にした結果、多くの大学が参照元とした大学の DP において、思考力と表現力に関する言及件数が多かったといった可能性が考えられる。

表 2 各種属性と 3 ポリシーの各内容に関する記述を含む割合

	学部生数		大学院生数		三大都市圏内外		設置者		
	~5000	5000~	~500	500~	圏外	圏内	国立	公立	私立
AP1：基礎学力	69%	81%	71%	85%	73%	75%	86%	82%	71%
AP2：精神	44%	48%	<u>49%</u>	<u>31%</u>	<u>37%</u>	<u>51%</u>	<u>24%</u>	<u>18%</u>	<u>52%</u>
AP3：能力活用	65%	74%	66%	79%	70%	68%	86%	76%	65%
AP4：思考力と表現力	44%	50%	48%	42%	42%	51%	43%	59%	47%
AP5：選抜方法	<u>26%</u>	<u>45%</u>	33%	38%	24%	41%	41%	29%	33%
AP6：目的意識	52%	60%	<u>59%</u>	<u>44%</u>	48%	62%	<u>43%</u>	<u>41%</u>	<u>59%</u>
CP1：建学の精神	28%	25%	<u>31%</u>	<u>12%</u>	<u>13%</u>	<u>38%</u>	<u>5%</u>	<u>0%</u>	<u>34%</u>
CP2：実践力	66%	59%	65%	58%	65%	62%	59%	59%	64%
CP3：人材育成	60%	57%	58%	63%	58%	60%	65%	76%	57%
CP4：科目編成	85%	84%	88%	75%	90%	81%	73%	94%	86%
CP5：成果と評価	62%	72%	64%	75%	64%	67%	<u>81%</u>	<u>53%</u>	<u>64%</u>
CP6：学びの形式	41%	46%	46%	33%	36%	48%	<u>27%</u>	<u>53%</u>	<u>45%</u>
DP1：思考力と表現力	55%	61%	59%	54%	59%	57%	51%	65%	58%
DP2：課題解決	65%	74%	69%	67%	70%	68%	65%	65%	70%
DP3：実践力	53%	44%	49%	48%	46%	51%	46%	47%	50%
DP4：分析力	35%	41%	37%	40%	40%	36%	38%	41%	37%
DP5：授与条件	85%	87%	87%	85%	82%	89%	89%	82%	86%
DP6：教育目標	65%	69%	<u>64%</u>	<u>79%</u>	64%	69%	<u>84%</u>	<u>59%</u>	<u>64%</u>
合計	144	101	193	52	107	138	37	17	191

その他の属性と内容との集計結果は表 2 の通りである。これらの属性以外にも、教員数や教員一人あたりの学生数についても分析を行ったが、あまり関係性は見られなかったため、ここでは省略している。学部生数については、AP5 との関係が特徴的である。大規模大学ほど選抜方法に言及する割合が高いことを示しており、規模の大きさから多様な選抜方法を取っ

ていることを示唆していると思われる。

大学院生数についてはかなり明確な差が見られた。特に建学の精神に関連する部分が多く、これは後述の通り私立大学において言及されることが多い内容である。学部学生数以上に、大学院生数において国公立大学は私立大学より多い傾向があり、その影響が見られたものと考えられる。

3大都市圏内外は、東京70km圏、大阪と名古屋の50km圏の中に入っているか否かであり、都市部の大学と地方の大学との区別のために用いている。AP2とCP1において顕著な差が見られた。これは、都市部に私立大学が多いこと、また、都市部においては大学の選択肢が多様であるため、より差別化を図る必要があることが影響していると思われる。

設置者は、国立、公立の大学数が少ないこともあり、結果が不安定になっている部分もあるが、より明確な差が数多く見られた。先述の通り、AP2、CP1という建学の精神に関わる部分は私立において言及されている割合が高い。私立大は、設立した個人、団体の意思が教育に反映されることが多いということであろう。また、DP6、教育目標に関してDPで言及している割合は国立において高かった。DPで教育目標について言及しているということ、学位授与において、その教育目標を達成しているかを国立大学では重視しているということになる。国立大学、公立大学、私立大学それぞれ設置の目的には違いがありこの結果はその違いを反映しているものと思われる。

最後に属性と単語の出現回数との相関を求め、その中で相関係数が0.4を超えた組み合わせについて取り出して確認した。結果、APにおける「世界」と大学院生数との相関が0.48、教員数との相関が0.43となった。また、同じくAPにおける「研究」と大学院生数との相関が0.44、教員数との相関が0.43であった。大学院生が多く在籍し、教員数も多い程言及されやすいということは、将来の研究への意識の強い大学では、学部入学段階から入学者にその資質を求めているということの意味していると思われる。

4 まとめと今後の課題

コレスポンデンス分析の結果より、単語の付置、軸の出現の仕方に若干の違いはあるものの、国公立大と単語との組み合わせで言えば、3ポリシーは、どれも単語の出現の構造において似通っていることが見て取れた。

内容と属性を組み合わせた集計の結果からは、特に地域性や学生数、すなわち規模が内容に与える影響が見て取れた。

今後の研究上の課題としては、より多くの属性に関して分析の対象とし、特徴的な属性と内容との組み合わせを発見すること、また、内容分類に関する再検討などが挙げられる。

参考文献

- 樋口耕一(2004). 「テキスト型データの計量的分析：2つのアプローチの峻別と統合」 『理論と方法』 **19**(1), 101–115.
- 樽松理樹・天野哲彦(2020). 「テキストマイニング技術を用いたアドミッション・ポリシーの分析」 『大学入試研究ジャーナル』 **30**, 80–85.
- 齋藤朗宏(2020). 「3つのポリシーの連携に関する分析」 『大学入試研究ジャーナル』 **30**, 74–79.
- 鳴野英彦他(2004). 「アドミッション・ポリシーと入学受入方策」 大学入試センター研究開発部共同研究報告書.
- 山村滋他(2014) 「アドミッション・ポリシーの効果に関する研究」 大学入試センター研究開発部共同研究報告書